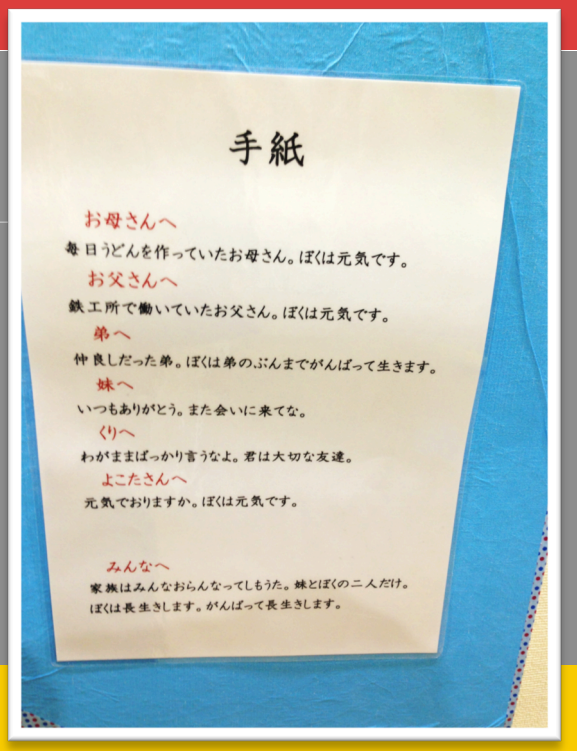
独立行政法人 国立病院機構
四国こどもとおとなの医療センター

アートプロジェクト

ー今月のショットー

療育指導部　2014年作品展より



手紙

お母さんへ
毎日うどんを作っていたお母さん。ぼくは元気です。
お父さんへ
鉄工所で働いていたお父さん。ぼくは元気です。
弟へ
仲良しだった弟。ぼくは弟のぶんまでがんばって生きます。
妹へ
いつもありがとう。また会いに来てな。
くりへ
わがままばっかり言うなよ。君は大切な友達。
よこたさんへ
元気でおりますか。ぼくは元気です。

みんなへ
家族はみんなおらんなってしもうた。妹とぼくの二人だけ。
ぼくは長生きします。がんばって長生きします。

2014年　11月号

ー院内の小さな声からー

時々、「病室に飾れている絵が気に入らないから替えて欲しい。」という要望があります。理由を聴いてみると、「こっちを見ているようで怖い。」「色が暗くて気持ちが沈む」など、皆さんご自分の気持ちを話されます。そんな時は新たに好きな絵を選んでいただき、すぐに絵を掛け替えます。病室では患者さんが同じ空間にいたいと思える絵が、正解だと考えるからです。先日、絵画を引き取った後、ボランティアさんたち数人にその絵画を見せて意見をうかがいました。するとある人は、「確かに何か不気味な気持ちがする」ある人は「見張られているようで見落ち着かない」と話されました。また、ある人は「私はこの絵は好きです。私の代りに何か伝えようとしてくれているようで。」また、ある人は「力が抜けてていい。」と話されました。当たり前の事ですが、人の心は皆違っていて、同じものに触れても、感じ方も考え方も違います。同じ人でもその時と場合によって違います。公共の場にあるアートは、ある程度、統計学的な視点からの解釈と、経験から提案してゆく必要がありますが、病室の絵画は出来るだけ前もって選別したり、表現を限定したりせず、あらゆるタイプのものを準備しておきたいと思っています。そして大切なのはいつでも動かせること。絵は病室で気配を消したり、時には見る人を不安な気持ちにさせたり、楽しませたり、安心させたりもします。それはそれぞれの絵が病院で自然に「生きている」ということです。

2014年　重心病棟作品展より

毎年、この季節に療育指導部の皆さんによって開催される重心病棟の作品展をとても楽しみにしています。今年は「カラフルポップコーン～はじけろ皆の想い～」と題して、入所者さんそれぞれがはじける想いを表現されました。作品展開催中に行われる授賞式では、優秀作品に対して院長賞や看護部長賞など、各賞が贈られます。その中にアートディレクター賞もあり、私は毎年一つの作品を選ぶのにとても時間がかかります。それほどパワーのある作品がそろっているということです。身体の不自由な方々にとって、細い線の一本が、絵の具をのせる小さな一点が、保育士さんに伝えようとする言葉一言が、すでに命の凝縮された表現行為であり、深い存在の意味と力を孕んでいます。そして、また、これだけ多種多様の表現を引き出すために、児童指導員さんや保育士さんがどれだけの時間を入所者さんと共に過ごし、対話を重ね、時には迷い、喜びを共有したか。その背景を想うと、深い感動を覚えます。

展示のお手伝いをしていた時、シンプルに額装された小さな作品が目にとまりました。何色かの色鉛筆でぐるぐると渦巻きのようなものが描かれています。もやもや絡まっている。という印象でした。題名は「あ、それ私のかばん！」思わず、笑ってしまった後で「おもしろい題名ですね。」と若い保育士さんに話しかけました。すると、「そうなんです！この方にはとても大切にしているかばんがあるんです。いつもいつもそのかばんのことが気になっていて。この絵を描いている時も手元を見ないで、かばんの方ばかり見てる。それでちょっとスタッフがカバンを移動しただけで言うんです。『あ、それ私のかばん！』って！」保育士さんは本当に楽しそうに何かを思い出してクスクス笑いながら話してくださいました。そんな風に出来上がった作品に、無理矢理きちんとした題名をつけないで、その時のありのままの瞬間を、まるでふわりとすくい取ったかのような題名をつけたこの保育士さんの感性は素晴らしいと思いました。こんな保育士さんたちの遊び心や柔らかな感性が、各病棟の隅々まで沁み渡って、皆の日常生活のベースを支えているのです。同じ病院で生活する入所者さんたちの、それぞれまったく違う感性や価値観をありのままに伝えたいと願う事。その願いが熱になって入所者さんの個性は生き生きとポップコーンのようにカラフルにはじけたのだと感じました。

今月の一枚

作家：衣川　朋子